刻む会たより

No. 23

2001.12.07

長生炭鉱の“水非常”を
歴史に刻む会
代表　山口武信
宇部市常盤町一―一―九
TEL〇八二六（二一）八〇〇三

韓国遺族会総会に参加して

山内　弘恵

一二月一日、下関より関釜フェリーに乗る。「刻む会」にとって、二度目の遺族会総会への参加の旅である。今回の訪韓の目的は、遺族会との親睦・交流であった。「刻む会」からの参加者は山口会長、島先生、澄田先生、井上洋子さん、大野・山内&子供達、そして、通訳として裵長老に参加していただいた。

一二月二日朝、釜山港に到着。金亨洙（キムヒョンス）会長、朴道寅（パクトイン）氏、そして、今回通訳をお願いした金福女（キムボンニョ）さんが出迎えてくださった。三人の車に乗り、大邱（テグ）へ。東大邱（トンテグ）のクラウンホテルにて、一四時三〇分より遺族会総会が開催された。

総会には、金亨洙（キムヒョンス）会長、楊玄（ヤンヒュン）副会長、金永基（キムヨンギ）副会長、孫鳳秀（ソンボンス）事務局長をはじめ、その他会員約一〇名が参加していた。

参加されていた遺族はほとんどが、来日されたことのある方だったが、今回新たに遺族会に加わった方（孫昌河（ソンチャンハ）氏）もおられた。

遺族会および刻む会各々の会長挨拶・自己紹介の後、八月一五日に亡くなった李元宰氏の冥福を祈って黙祷を捧げ、李元宰氏の意志を引き継ぎ、活動を続けていくことを確認した。

次に、遺族会の活動報告があった。主な内容としては、釜山にある法然寺を通じ、日本の西光寺にあるような位牌を作成し、遺族達がいつでもお参りができるように、慶州に奉納したということが報告された。

その後、食事を交えなが

ら交流し、一七時に総会は終了した。

尚、この総会で、二〇〇二年の追悼式の日程も双方が確認し、確定できた。

（翌日、大野・山内&子供達は都合により帰国したので、その後の報告は澄田先生の報告を参照。）

今回私達は、わずか一歳になったばかりの子供達を連れて韓国へ渡ったわけだが、結論的には思い切って行ってよかったと思っている。子供達も遺族の方々と交流でき、貴重な時間を過ごすことができた。まだ、何も解らない子供達だが、日韓の重要な架け橋になったにちがいない。

子供達を抱えていたので、みなさん細部にわたって気を遣ってくださった。そんな遺族の方々の心配りがうれしかった。ふと、遺族の方々が日本へ来られたとき、私は十分な気配りができているだろうか不安になる。

長生炭鉱の水非常から既に六〇年の時が流れた。当時お腹の中にいた子供ももう六〇歳になってしまった。今年、李元宰氏が亡くなったように、犠牲者を知っている世代はどんどん年老いていく。私たちは彼らの生きている間に果たして目的を達成できるのだろうか・・・。しかし、私たちの子供達の世代にまで「恨」を残してはならないと思う。遠い韓国の地で、年老いた遺族達と再会し、彼らの生きているうちにせめて追悼碑だけでも・・・という思いを新たにした。

（続）訪韓報告

澄田亀三郎

第二日、金会長・楊副会長・金副会長・朴道寅さんの案内で慶州観光へ。私達へのもてなしであり恐縮してしまう。途中のパーキングエリアで朝食。ここでもバイキング形式。私は大きな秋刀魚を取る。焼きたてで美味しい。ここで大野・山内一家と別れ、高速道路を飛ばして目的地へ向かう。

慶州は、紀元前五七年から九三五年まで新羅王朝の都として約千年間栄えたところで、奈良の姉妹都市。今は人口約三〇万の静かな田園都市。古墳群と桜並木が目をひく。

先ず国立慶州博物館に行くが、月曜日とあって生憎休館日。ぽつりぽつりと雨が降りだしたが、新羅の文武王が三国統一を記念して六七四年に造った離宮・臨海殿址へ向かう。雁鴨池と称ばれている庭の池は何ではなしに朝鮮半島の形をしている。

次は、有名な古墳公園・大陵苑。円墳の内部が見学できる天馬塚で、天皇家の遺品とばかり思っていた金の王冠等が陳列されているのに驚いた二〇年前を思い出した。芝に覆われた半円形波打つように並び、赤い実を鈴なりにつけた山椒の木々、折からの雨に濡れながら感慨一入であった。

昼食は、蔘鶏湯（サムゲタン）。若鶏の腹の中にご飯・蔘・ナツメ・ニンニク・栗等を入れて煮込んだ料理である。初めて食べる者ばかりで感激。

午後からは、仏国寺とその奥にある石窟庵へ。両方とも世界遺産に登録されている。仏国寺は、秀吉の朝鮮出兵の時に焼かれ、今の建物は再建されたものだが、土台の大きな石には当時の焼け跡が残っていた。雨のなか石窟庵への三kmの道を歩いたのもよい思い出になった。仏国寺のすぐ近くに、今年三月、三百名の信徒が長生炭鉱犠牲者の位牌を作って宇部を訪れて法要された法然寺の法堂があったが、日も暮れかかっていたので、車窓から拝見するしかなかった。

雨と渋滞に苦しみながら、高速道路を走って釜山の金会長宅へ。金会長は、繁華街で河豚鍋店を経営しておられる。ご夫人と共に私達一行を歓待してくださった。河豚鍋は、日本の河豚ちり

と違って、長いもやしと河豚だけの鍋料理である。体が温まった。泊まるホテルは金会長のお店の前。ホテルに引きあげたのは十時半頃ではなかったろうか。

翌日は、釜山観光。釜山は、人口約三八〇万の、ソウルに次ぐ大都市。実は、当初の計画では、昨日のフェリーで帰国する予定だったのだが、切符がとれず、帰りが一日延びたのである。今回の通訳者としての労をとって頂いた裵さんは、ソウルからの空路で帰国されるのでお別れ。残った山口・島・井上・澄田の四人は、『刻む会』事務局を担当してくださっている山内さんの友達の友達という金福女さんの車で出掛ける。金さんの運転も女だてらに（失礼！）なかなかの腕前。釜山の交通量ではレンタカーを借りても立ち往生するだけだ。私達は、行き先を金さんに一任した。

私達は、郊外の金井山城跡を横目で眺めつつ梵魚寺へ向かう。この寺は、六七八年に建設された禅宗の総本山である。幾つかの法堂では数十名の婦人方がお経を唱えながら熱心に礼拝していた。私は、日本とは違う仏教の姿を見たように感じた。ご遺族が法然寺に位牌を安置された気持ちが少しばかり解ったように思えた。

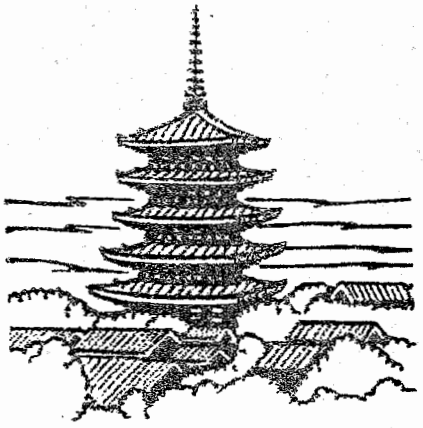
井上さんが一足先に博多経由で帰国されるので、釜山港に。ターミナル三階の食堂で昼食。ピビンパとチジミを食べる。日本より安い。

井上さんを送って、私達三人は、再び市内観光。金さんは、国連墓地・市立博物館・小西行長城・国際市場・チャガルチ市場に連れて行ってくださった。私は、朝鮮動乱の時、たくさんのトルコ兵が戦死したことを知らなかった。また、釜山にも「和館」が存在していたことも教えられた。市場は広く、品物の豊富さと人の多いのに驚いた。値段も安い。

金さんの携帯電話に金会長からの電話が入り、港まで送りに来たいとのこと。私達は恐縮して、もうご挨拶してお別れしたのだから、と繰り返し断ってもらう。

私達が、乗船締切時間を大幅に超えて釜山港に到着したら、金会長と朴さんが来ておられるではないか。私達は挨拶もそこそこに、来年二月の追悼集会での再会を約束して、乗船口に駆け込んだ。

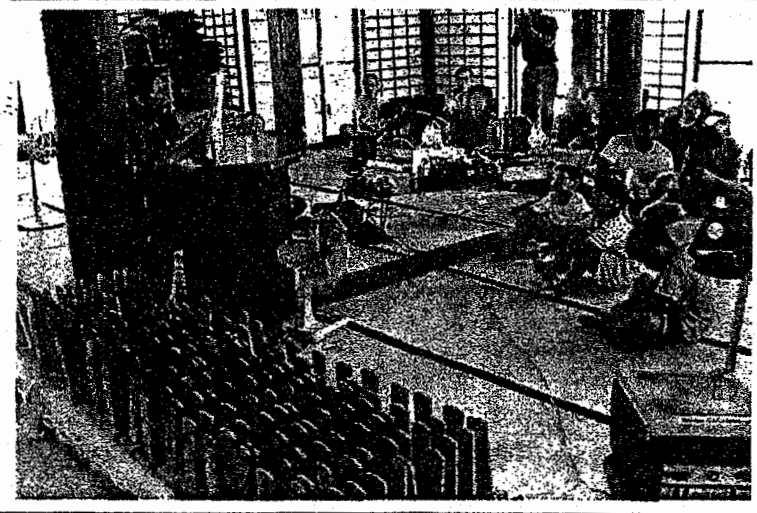
今回の遺族会総会陪席を目的とする訪韓は、公私ともに大変有意義であった。『刻む会』に惜しみない協力をしてくださっていた京都在住の遺族・李元宰さんが亡くなって、一つの転機を迎えていた『刻む会』の活動は、今後一層力強く、所期の目的に向かって推進されるに違いない。それにしても、遺族会の方々の鄭重なる歓待にはお礼の言葉もなかった。私は、今、日韓民衆の交流の素晴らしさを経験させてもらった喜びに満たされている。



2001.7.29 夏のフィールドワーク 報告

水非常学び犠牲者へ供花

刻む会が長生炭鉱フィールドワーク



位はいを前に長生炭鉱の歴史を聞く参加者

「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」(山口武信会長)の「海に沈んだ炭鉱フィールドワーク」は29日、西岐波の西光寺であり、犠牲者の位はいを前に、親子連れら約50人が1942年(昭和17年)におきた炭鉱事故について熱心に学んだ。

西岐波の長生炭鉱の水没事故は、42年2月3日発生し、約200人が犠牲になった。7割が朝鮮半島から連れてこられた人たちで、戦時中のため、報道もほとんどされず、歴史にうもれていた。遺体も引きあげられていない。歴史に刻む会は、ひとりでも多くの市民へ関心をふかめてもらおうと、夏休みの恒例として、フィールドワークを実施している。

会では、山口会長が「犠牲者は、1383人といわれているが、こと西光寺には187人の位はいがあり、180人という記録もあり、いまだはっきりしない」と前置きし、「1333人の朝鮮半島からの労働者が確認されたが、日本名のなかにも本籍が韓国や北朝鮮の方もおり、戦時中の複雑さがうかがえる」「当時は情報公開などなく、戦時中の労働災害としては国内で最大だったにもかかわらず、新聞にもほとんど掲載されなかった。そして、現在、あの海岸のピーヤ(石炭を掘るときの排気筒)もなんなのか知らない人がおおい」「なぜ、日本人ではない人たちが、見知らぬ国で死ななければならなかったのか、その疑問を心に刻んでほしい」と話した。

このあと、事故をわかりやすく説明した紙芝居「アボジは海の底」や炭鉱の話などがあり、理解を深めた。長生海岸へも行き、犠牲者へ花を供えた。

宇部時報 3/1

犠牲者の位はいを前に水没事故の悲劇を振り返る参加者（西光寺で）

西岐波の海に沈んだ炭鉱

親子ら40人が歴史を学ぶ

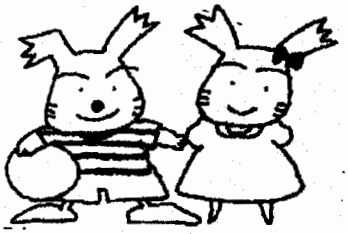
戦時中、宇部市西岐波の長生炭鉱で起きた水没事故について学ぶ「海に沈んだ炭鉱・フィールドワーク」が二十九日、犠牲者の位はいが安置されている西光寺であり、市内に住む親子や学生ら四十人が参加。悲惨な歴史を振り返り、犠牲者のめい福を祈った。長生炭鉱の〝水非常〟を歴史に刻む会（山口武信会長）主催。

同炭鉱は一九三三―四五年操業の海底炭鉱。事故は四二年二月三日に発生し、百八十三人の犠牲者を出した。そのうちの百三十人余りが朝鮮人だった。事故後、坑道は封鎖され、遺体は今も海底に残ったままになっている。

犠牲者の位はいを前に紙芝居「アボジ（お父さん）は海の底」を見たり、山口大工学部名誉教授の島敏史さんの話を聞いたりした。島さんは「昔、宇部が炭鉱の町であったことは現在の町並みからは想像しにくいかもしれないが、悲劇を経て今のわたしたちの幸せがあることを忘れてはいけない」と訴えた。

その後、海岸へ行き、今も残るピーヤ（排気筒）を眺めて花束を供えた。

悲劇を経て今の幸せが…



地元中心のもう配布新聞折込みの効果なのか、今年も多数の応募があった。少しづつだが、成果があがっているようだ。

遺族招聘カンパのお願い

一九四二年二月三日、宇部市西岐波の長生炭鉱で水没事故が起こり、一八三名（現在確認されている人数。正確には不明）が海底に閉じこめられたまま亡くなりました。その大部分が故郷を離れ、日本の労働力として連れて来られた朝鮮の人々でした。

私たちは、この事故の持つ意味の大きさを考え、「長生炭鉱の水非常を歴史に刻む会」を結成しました。この会は、①長生炭鉱のピーヤの保存、②追悼碑の建立、③事故記録の調査・発掘を目的として活動を続けて来ました。そして、一九九三年より毎年韓国より遺族の方をお招きして追悼式を行ってきました。今年も二月二日（土）の午後に長生海岸にて追悼式を行う予定です。このために約一〇〇万円の費用が必要となりますので、今年も皆様の支援カンパを心からお願い申し上げます。